

保育者として…… 育つこと・育てること

矢萩 恭子

若い保育者を育てるという役割、ひいては「保育者の専門性」について考えがめぐるのである。

保育者の専門性について

学生時代以来、言語臨床の相談室、養護学校、聾学
校、そして幼稚園と幼い人たちと関わるいくつかの現
場を経験してきた。さまざまな方々の支えがあつて、
長い間幼い人たちの身近にいられたことの幸せを感じ
ながら、出会い、別ってきた沢山の子どもたちに思い
を馳せる。果たして自分は保育者として成長できただ
ろうかと自問する。そして、ここ数年、痛感してきた

環境としての保育者という側面から見たとき、保育
技術的な面から当人の人間性や人生観に至るまで保育
者の在り方が保育の内容や質を決定づけるという意味

において個々の保育者に課せられる責務は重大である。しかし、"専門性"という点から考えてみると、保育者は保育の場で起きていることについて最大限感知し、個々の子ども・子ども同士の関係・自分と子どもたちとの関係などに纖細で鋭敏な意識を持ちつつ、同時に瞬時の判断から実際に動き関わっていく。この"感じ考え方の動き関わる"というところにこそ極めて専門性の高い保育者としての営みがあると言えるのではないだろうか。

無意識のうちにされている保育行為の価値もこれを否定するものではないが、保育の現場において保育者は極めて高い意識のレベルで子どもたちを捉えていると言える。従つて保育者は、それが子どもにとって必要と判断したならば、自分自身の行動をかなり意識的に抑制したり、反対に保育者の意図を表そうとしてコントロールしたりする。関わっている子どものわずかな変化や成長を逃がさずに捕まえようと努める。そ

若い保育者との交わり

して、子ども同士のトラブルや子どもたちの間で起こっていること、遊びの状態、それぞれの気持ちや考え方、関係などについて、自分が捉えた出来事と出来事の点と点をつないで、その出来事の背景や文脈、そのときの状況に思いを至らせ、クラスの子どもたちの姿をさまざまな角度から理解し、把握しようとする。これらはいずれもそつたやすいことではなく、自らの日々の保育を振り返り、そこから次の保育計画を生み出し、再び実践に臨むという一連の保育行為を地道に繰り返す修練を必要とする。今日の保育者は、再び新たな理解と願いをもつて明日の保育者となるのである。子どもたちとの心の通じ合いや成長の喜びを糧にこの不斷の循環性を持ちこたえながら進んでいくところに専門家としての保育者の生活がある。

幼稚園の現場には、免許状取得を目指す学生たちが

保育の実習に訪れる。短大の一年生、二年生のさまざま
な形態の実習受け入れ先として、これまでに出会つ
た学生の数は相当数になる。入れ替わり立ち代り訪れ
る実習生をその都度克明に記憶していくことは困難な
ので、非常に感覚的な手ごたえということになるが、
実際に子どもたちと会ってみての新鮮度が年々落ち
てきているように思われる。実際の子どもとの衝撃的
(であるはずの) 出会いから実習生が何を感じ、担任
である私と行うその日の保育を振り返る反省会からど
んなことを考えたのか、言葉として返つてくることは
もちろんのこと、表情や意欲としても伝わつてくるこ
とはかなり希少になっている。学生たちが慣れない保
育者としての生活(清掃など早朝からの保育準備、実
際の保育、保育後の掃除、教材の準備を始め保育後の
仕事の手伝い、反省会、そして家に帰れば何時間も要
する日誌の作成など) でかなり疲労困憊することは分
かっているつもりである。何が何だか分からないうち

に実習が終つてしまうのかもしだれないが、挨拶や返事
の仕方、或いは保育中の動き方や姿勢・表情、遊びへ
の参加の仕方や関わり方、雑巾やほうきの使い方な
ど、様々な事項について事細かに手取り足取り同じこ
とを何度も知らせていかないと短い実習期間の中で
は伝えたいことが伝わらないようになつてきている。

一方、歳月の自然な成り行きからまだ経験が浅
いと自認していた自分が先輩について行くだけの保育
者ではいられなくなつてきた。自分がときがおこがま
しいと感じながらも、年度の職員の配置によつては経
験の浅い後輩たちと共にその年齢の保育を実際に進め
ていかねばならない現実が押し寄せてくるようになつ
た。年を追うごとに増す世代の差への意識や、目まぐ
るしく流れていく現場の時間などから、経験の浅い本
人が気づいて意識するまで待つことや相手なりの意図
を見極めるだけの時間的猶予が持てないままに、一方
的に指摘したり、注意したりすることも正直言つて少

なからずあつた。そして後味の悪い違和感が残つた。

違和感を覚えつつも、自分の足元ばかりに視線が行つてあまりにも周りが見えていない様子や、当然質問が出て然るべき事柄に何の反応も示してこないことや、若いはずの彼らが子どもたちが帰ると疲れ切つてしまい、何を感じ考へているのか子どもの様子を話すこともなく寡黙にいること、そんなことばかりが気になつた。

そんなとき、その昔、自分がどのようにして子どもと出会い、現場の先輩方からどのように育てられてきたかを改めて省みることになった。

私の子どもたちとの出会い

ことばらしいことばをほとんど話さず、要求があるときには私の手首を掴んで対象物のところへ置くことで自分の気持ちを伝えてくれたNくん。無表情なまま私の顔を見ずに手首を掴まれることに抵抗を感じ、N

くんが私に対してどんな気持ちを抱いているのかつかめず、それでも何とかNくんの思いを理解したい、少しでもNくんと心を通わせたいと願いながら何ヶ月も同じような関係が続く。そしていつの間にか、指先に伝わるわずかな力の変化やふつと流してくれた視線の楽しげな感触に天にも昇らんばかりの喜びを感じる自分に変わつていった。

にここにことよく笑い、一見社交的なSちゃんとの散歩では果てしなく続く進路決断の迷いと要求されるおんぶに背負うSちゃんの自立と依存との葛藤を支えき



れなくなりそうなときがあつた。こんな自分で良いのか、揺らぐ気持ちを見透かされ座り込んだまま動こうとしないSちゃんに思わず受け止めることを放棄し立ち去りかけて、我が身の狭さを突きつけられまた自己嫌悪に陥るというようなドロドロした現実を経験した。その他、長い時間トランポリンを一緒に飛び続けたり、高い場所や地下鉄やスーパー・マーケット、エレベーターなど公共の場所を好んで目指して行く小さな後ろ姿を追いかけたり、何度も“いないないばあ”のようなかくれんばを繰り返したり、フエンスの網の穴から落ち葉を落としたり、數えきれない真剣な出会いと交わりがあった。今考えるといずれの子どもたちともしっかりと出会い、しっかりと関われるだけの恵まれた時間と環境があつた。私は先輩からあれこれ指図を受けることもなく、信頼されてその場を任せられ、相手のこと、相手と関わる自分自身のことをじっくりと感じ、見つめることを許されていた。ことばに

なる以前の経験の感触をたっぷりと味わうことが出来た。この点が今の若き保育者と決定的に違っているようと思われてならない。初めて実際の子どもと出会うというそのときに、こなさねばならないことの義務やとてもゆつたりと一人の子どもとの関わりを感じてなどいられない忙しさの中で経験する子どもとの出会いとはどんなものなのだろうか。

現場での保育者同士

機敏な動きとタフな体力を必要不可欠な条件として、現場（幼稚園）の保育者は早朝から子どもたちが帰ったあとも遅くまでその動きを止めない。身体は常に保育者同士の持ち場の分担意識（例えば、誰かが園バスに添乗していれば、残りの者が保育後の掃除を請け負う、一人が園庭の子どもたちを見ていれば、もう一人が保育室やその他の室内を見るといった具合に）から、動きながらも次の仕事を考え、無駄のない素早

い動きを心がける。

保育後は保育後で少なくはない行事や先の保育のために雑多な仕事を次々とこなしていかねばならない。打ち合わせに割かれる時間はどうしても省くことが出来ないので、書類関係の仕事など取り切れなかつた分は不本意にも持ち帰りの仕事となる。肝心のその日の保育を振り返る反省会は電話の応対や別の係りの仕事などによつてしばしば中斷され、保育記録を書くといふ大切な行為もまた持ち帰りとなつてしまふ。

それでも何とか忙しさの中で交わすその日の保育のある場面・ある子どもについての伝え合いは往往にして、母親の在り方への原因追及やその子どもにとっての課題確認に終始しがちで、自分の保育の在り方や方向性を含めた反省を話し合つたり、園全体の保育の構造を見直したり、各自の保育の中身を差し出し合つて本当の意味での保育研究へとつないでいつたりするこにはならない。担任同士ともなると、たとえ保育室

が隣あつていても一旦クラスが集まつてしまふとなかなか相手の保育の具体的な部分は見えないもので、ある種の勇気が必要となつてくるが、個々の担任の保育をオーブンにして互いの保育の質を高め合うためには、担当の年齢を超えた親密な話し合いや担任とは違つた立場の保育者からの話題提供など忙しさに抗した意識的な方向づけが是非必要であろう。

園全体の在り方

ずっと以前、私の勤めていた園に他園の主任の方が保育の巡回指導に来て下さつたときに言われたことばを思い出す。保育経験の豊富なベテランぞろいだった当時、私たちは『職人になるな』と言られたのである。経験が重なり互いの保育の性格も何となく熟知し、自分の保育に足りないものも自分なりに認識していく、ある意味そこに安住していた私たちは互いの保育には触れずにおり、園全体が分かり合つてゐる者同

士のマンネリ化した調和と安定の感を呈していた。そんなどきに、日頃は見せ合わない自分の保育の指導案を出し合い、全員で保育後の話し合いを行つたことは大変新鮮な刺激があつた。その日の保育を振り返つているその場で、自分たちが行つて いる保育を整理したことばで伝えることの重要性を指摘されたのである。

子どもたちの自由な活動、子どもが自ら始めた遊びや友だち関係、日々の生活を尊重し支えながら二年、三年という長いスパンを通して子どもの変化や成長を見通し、保育者の役割を追究していく保育の中身を若い保育者に伝えていくのは難しい。なぜなら、保育は経験が重なれば容易に行えるようになるというようなものではなく何年経つても日々新たな悩みや問題と向き合つていくことになるからである。確かに、経験といふ点で個々の保育技術や活動の引き出しに弱い若い保育者は、どうしても明日の保育のためにこれらをマニュアルとして取り入れがちになる。否が応にも明日

は来て、何らかの実際的な保育内容を展開していくなければならないからである。そこで不可欠なのは、なぜこの機会にこのクラスでこの保育内容をこのようにして行うのかという反省的視点であろう。

ここで再び保育者の専門性という点に話が戻るが、園における然るべき立場の者は、個々の担任の力量や特徴を引き比べて一方を他方よりおとしめ保育に向かう意欲を低下させるのではなく、今日の保育を子ども・保育者の両側面から振り返り、子どもたちの状態を読み取り、明日の保育を計画・立案していく力を蓄えていくことのために園全体が一丸となつて取り組んでいく姿勢をこそ、保育者同士が育て合う職場の環境として用意していくよう願いたい。

現場ほど大変で高度な保育の営みを担つているところはなく、現場の保育者ほど真の保育研究者で在り得る者はないと思われるるのである。